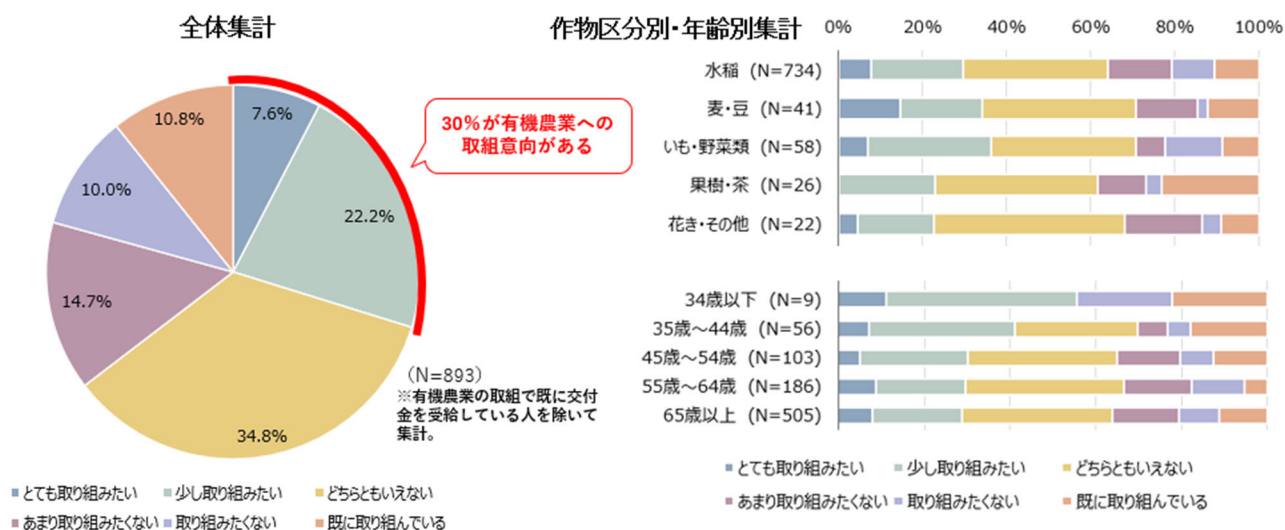


エ 有機農業への取組意向（※有機農業取組農業者以外を対象）

有機農業への取組意向は、「とても取り組みたい」、「少し取り組みたい」の合計が約30%であった。作物別にみると、特に「いも・野菜類」と「麦・豆類」で取り組みたい意向が高かった。年齢別にみると、44歳以下で比較的意向が高い傾向が見られた。

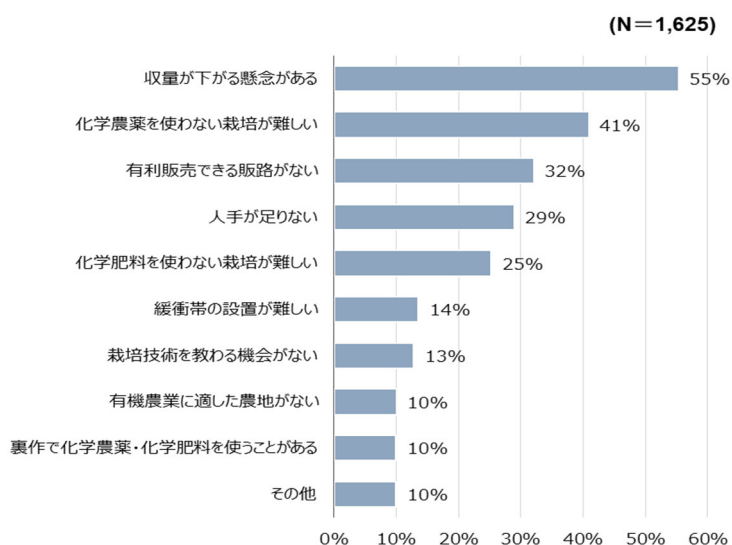
図4-4 有機農業への取組意向



オ 有機農業に取り組む上での課題

有機農業に取り組む上での懸念としては、「収量が下がる懸念がある」の割合が最も多かった。

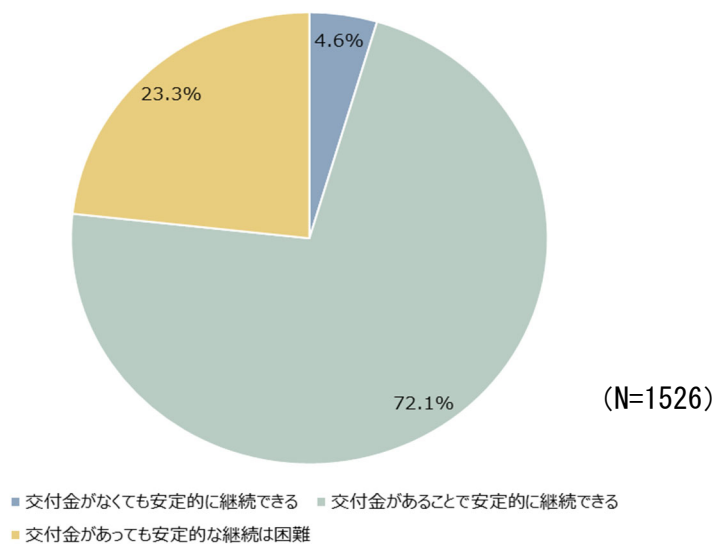
図4-5 有機農業に取り組む上での課題



カ 交付金の効果（全体）

交付金を受け取ることで安定継続できている農家が約72%と大半を占めた。

図4－6 交付金の効果(全体集計)



（２）環境保全型農業直接支払交付金に取り組んでいない農業者への意識調査

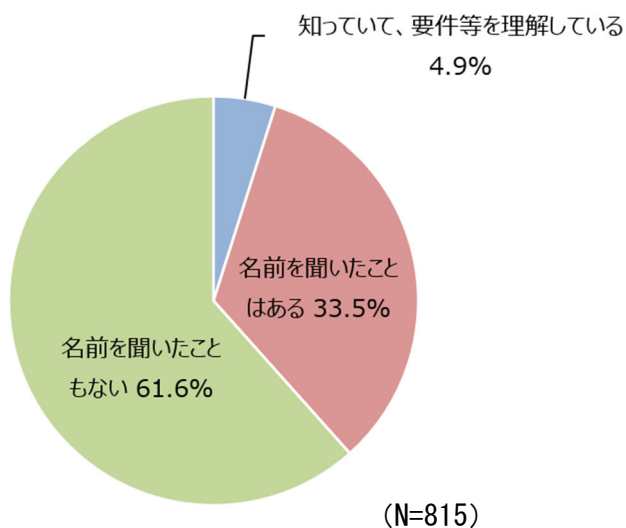
- 交付金の認知度は、「名前を聞いたこともない」が約62%を占めた。
- 「環境保全型農業に取り組んでいない者」において、環境保全型農業への取組意向がある人は約46%程度であり、取組意向は44歳以下の区分で比較的高かった。

〈全体〉

○ 交付金の認知度（全体）

交付金の認知度は、「名前を聞いたこともない」が約62%を占めた。

図4－7 交付金の認知度

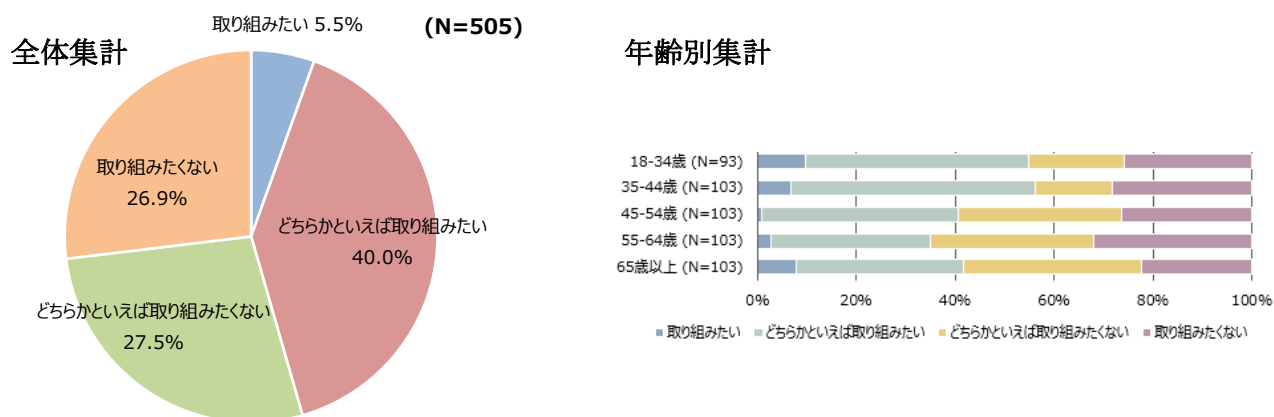


〈環境保全型農業に取り組んでいない者〉

ア 環境保全型農業への取組意向（環境保全型農業に取り組んでいない者）

環境保全型農業に取り組んでいない農業者において、環境保全型農業への取組意向がある人は、約46%程度であった。また、環境保全型農業への取組意向は44歳以下と65歳以上で比較的高かった。

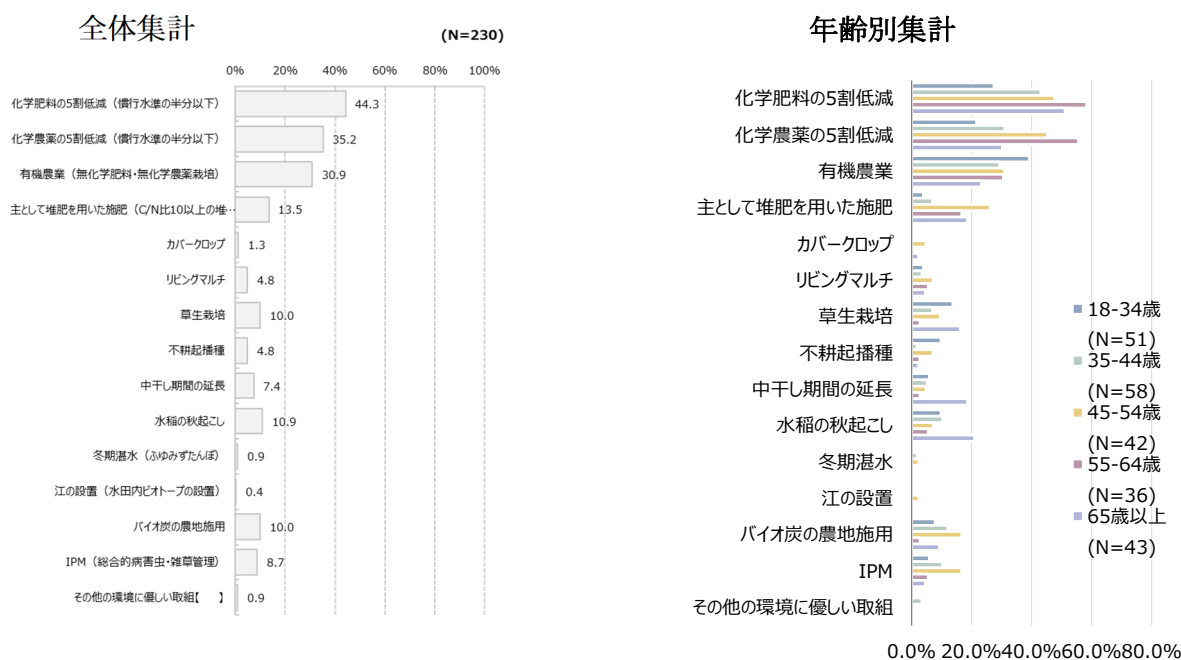
図4-8 環境保全型農業への取組意向



イ 実施したい環境保全型農業の取組

実施したい取組は、34歳以下では有機農業が多い一方、35歳以上では化学肥料・化学農薬の5割低減が多かった。

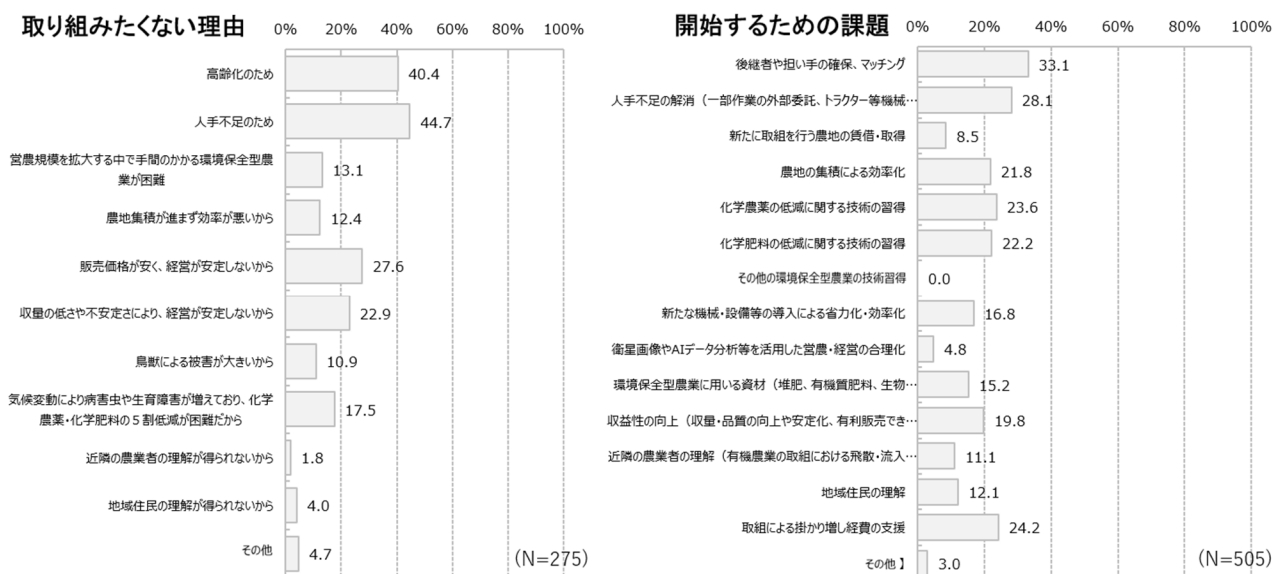
図4-9 実施したい環境保全型農業の取組



ウ 環境保全型農業に取り組もうと思わない理由及び開始するための課題

「取り組みたくない」及び「どちらかといえば取り組みたくない」と回答した人の取り組みたくない理由は、「人手不足」が最も多く、次いで「高齢化のため」となっている。環境保全型農業を開始するための課題としては、「後継者や担い手確保」が最も多く、次いで「人手不足の解消」となっている。

図4-10 実施したい環境保全型農業の取組

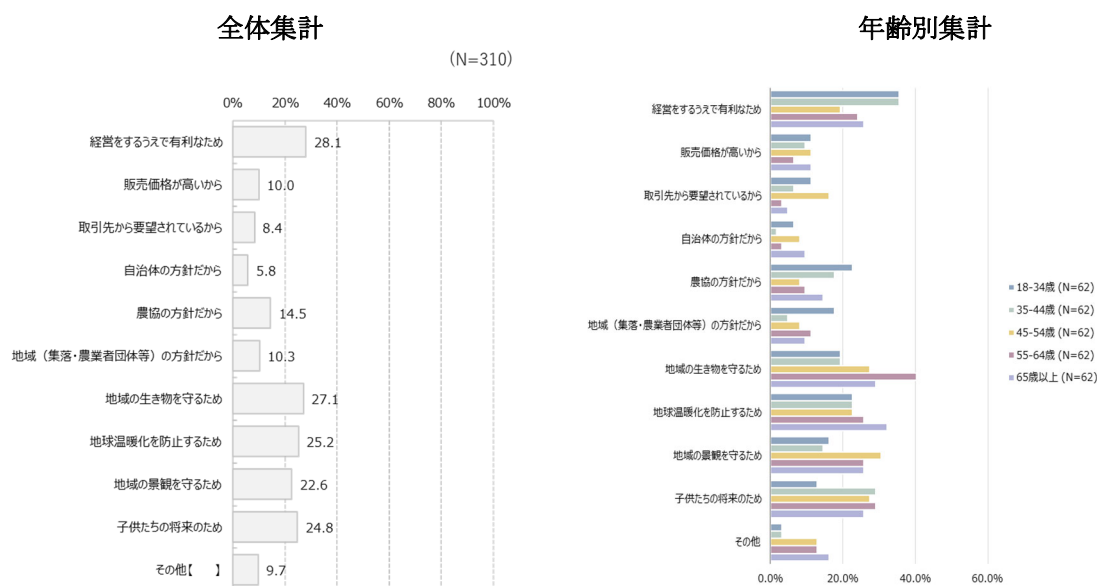


〈環境保全型農業に取り組んでいる者〉

○ 環境保全型農業を行っている理由

環境保全型農業を行っている理由は、全体では「経営をするうえで有利なため」が最も多く、年齢別では45歳以上は生き物を守るため・地球温暖化の防止が多く挙げられた一方、44歳以下では経営上有利であること多く挙げられている。

図4－11 環境保全型農業を行っている理由

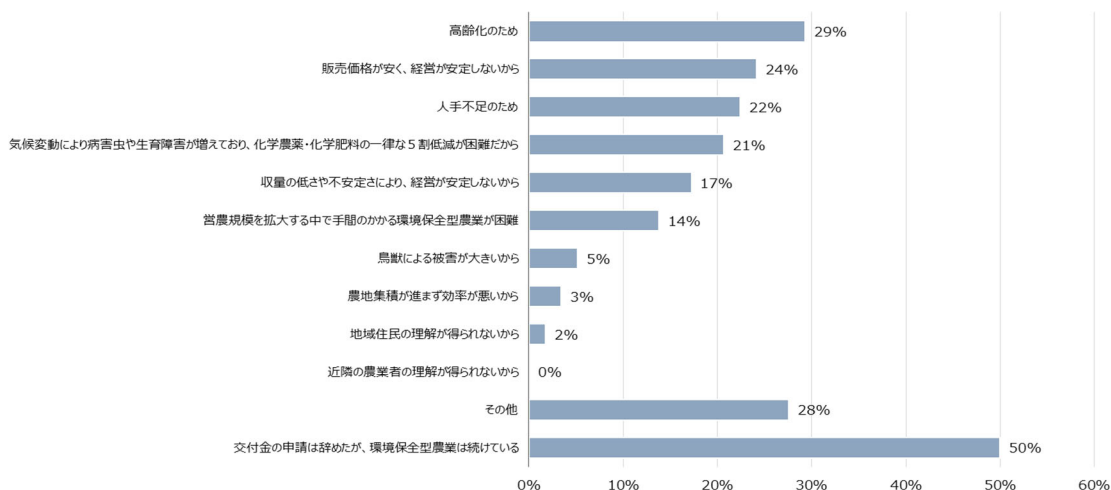


（3）過去に交付金を受給していた農業者への意識調査

環境保全型農業の取組を断念した理由としては、「高齢化のため」が最も多く、次いで「販売価格が安く、経営が安定しないから」となっている。

また、「交付金の申請は辞めたが、環境保全型農業は続けている」の回答が半数を占めていた。

図4－12 環境保全型農業の取組を断念した理由



2. 環境保全型農業に対する農業者の経営実態 (A)

<環境保全型農業経営実態調査>

- 有機農業の取組では、慣行栽培時と比べ、労働時間は約 2.4 倍となっている。
また、カバークロップでは、慣行栽培時と比べ、労働時間は約1.2倍、資材費は約1.3倍、堆肥の施用では、労働時間は約1.2倍、資材費は約1.1倍となっている。
- 有機農業の取組では、単収は慣行栽培時に比べて約 9 割となる一方、販売価格は約 1.6 倍となり、収入は約 1.4 倍となっている。
- 有機農業の取組により生産された主作物の販路は、「小売業者」が約 4 割と最多で、次いでインターネットや農産物直売所等を利用した直接販売が多くなっている。
また、カバークロップ及び堆肥の施用の取組では、JAが最多となっている。

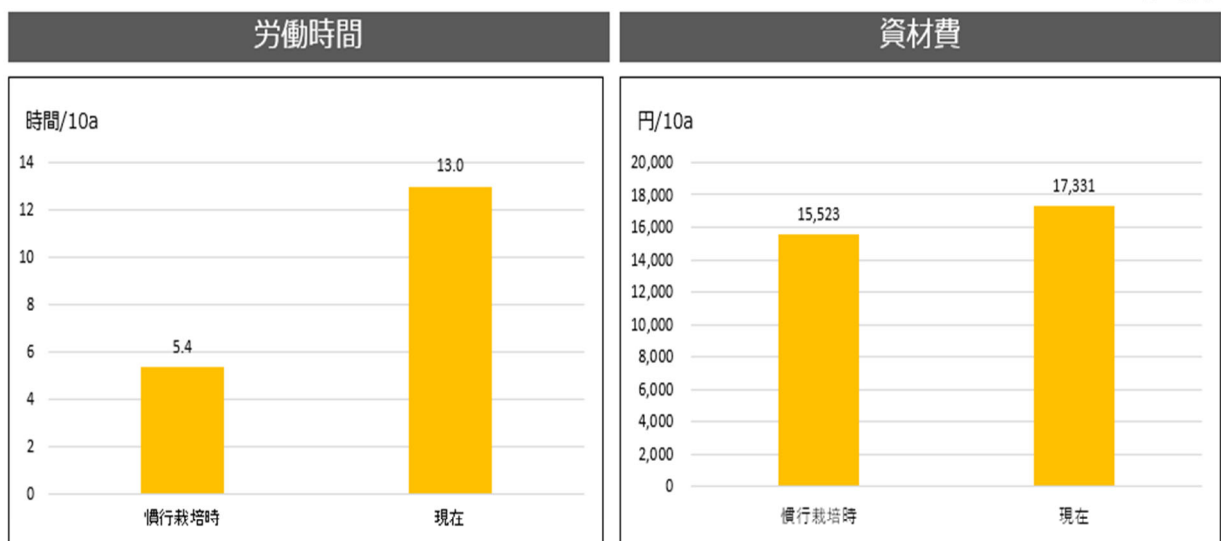
(1) 経費に関する集計結果

ア 有機農業

有機農業の取組を行う農業者の労働時間・資材費の状況を慣行栽培時と有機農業の取組（現在）で比べると、労働時間は約 2.4 倍となっている。

図4-13 経費に関する集計結果(有機農業)

N=675



○経費の状況

慣行栽培時 23,756円 = 労働費 8,233円(5.4×1,536円) + 資材費 15,523円

取組時 37,284円 = 労働費19,953円(13.0×1,536円) + 資材費 17,331円

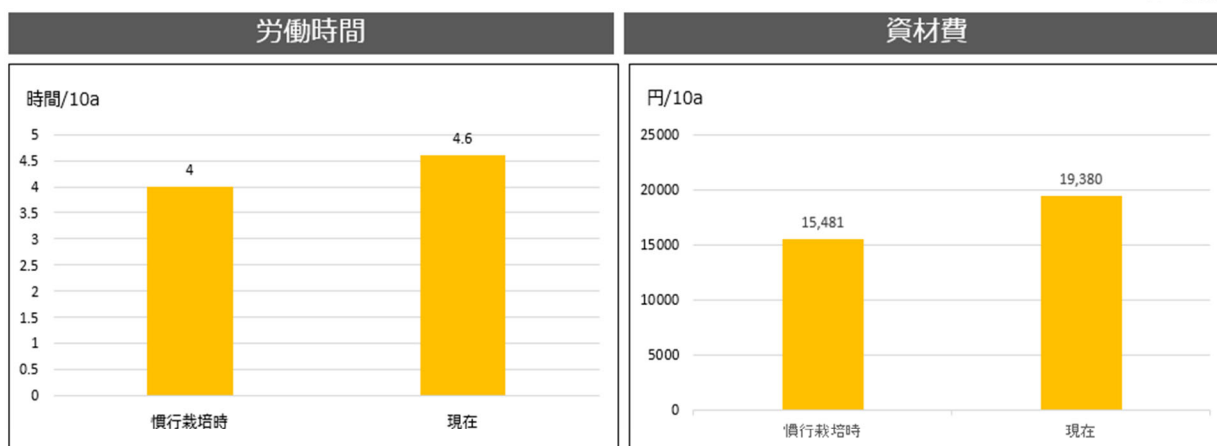
令和2年度生産費統計より
10a当たり時間労働費を算出

イ カバークロップ

カバークロップの取組を行う農業者の労働時間・資材費の状況を慣行栽培時とカバークロップ取組（現在）で比べると、労働時間は約 1.2 倍、資材費は約 1.3 倍増加している。

図4－14 経費に関する集計結果(カバークロップ)

N=398



※取組に直接関係のないその他資材費は除き、種子代は別途、メーカーに聞き取りを行った実勢価格に代えている。

○経費の状況

慣行栽培時 21,625円 = 労働費 6,144円 (4.0 × 1,536円) + 資材費 15,481円

取組時 26,446円 = 労働費 7,066円 (4.6 × 1,536円) + 資材費 19,380円

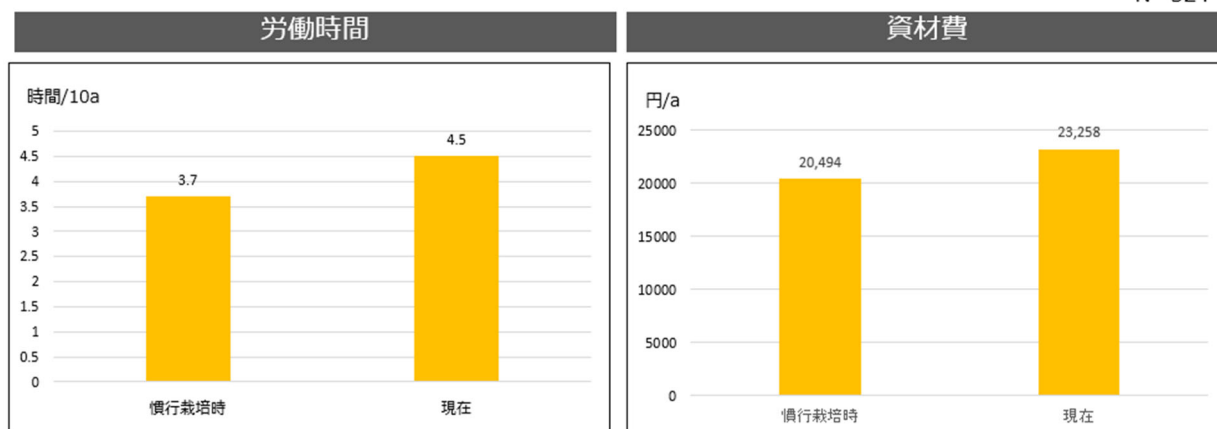
令和2年度生産費統計より
10a当たり時間労働費を算出

ウ 堆肥の施用

堆肥の施用の取組を行う農業者の労働時間・資材費の状況を慣行栽培時と堆肥の施用の取組（現在）で比べると、労働時間は約 1.2 倍、資材費は約 1.1 倍となっている。

図4－15 経費に関する集計結果(堆肥の施用)

N=324



※取組に直接関係のない資材費は除いている。

○経費の状況

慣行栽培時 26,177円 = 労働費 5,683円 (3.7 × 1,536円) + 資材費 20,494円

取組時 30,170円 = 労働費 6,912円 (4.5 × 1,536円) + 資材費 23,258円

令和2年度生産費統計より
10a当たり時間労働費を算出

(2) 収入に関する集計結果

ア 全体集計

単収・販売価格・収入（単収×販売価格）について、取組別に取り組を行っている現在と慣行栽培時を比較した結果、有機農業の取組では、単収は慣行栽培時に比べて約 9 割となる一方、販売価格は約 1.6 倍となり、収入は約 1.4 倍となっている。

表4—1 収入に関する集計結果(全体集計)

	単収（現在÷慣行栽培時）		販売価格（現在÷慣行栽培時）		収入（単収価格×販売価格）
	平均値	算定N数	平均値	算定N数	平均値
有機農業	86%	319	162%	313	1.39
カバークロップ	96%	285	95%	280	0.91
堆肥の施用	97%	214	98%	206	0.95

※ 1 算定N数はトリム前の値（平均値計算にはここから上下一定数を除いたサンプルを使用）

※ 2 その他の取組はサンプル数が少ないため集計していない。

イ 有機農業

有機農業の取組について、単収と収入の取組継続年数別変化を見ると、取組 1～4 年目の単収は、慣行栽培時と比べて 75%と低いですが、5 年目以降は約 9 割となっている。

また、取組年数による収入は、取組 1～4 年目では慣行栽培時に比べて販売価格は上昇するものの単収が低いことから約 1.2 倍となり、取組 5 年目以降では慣行栽培時に比べて販売価格が上昇するとともに、単収も 1 割程度の減少にとどまることから約 1.4 倍となっている。

図 4—16 収入に関する集計結果(有機農業)

